



アイヌ文化の振興、現在と未来
第11回

子供たちと担うアイヌ文化



郷右近 富貴子 (ごうごこん ふきこ)

釧路市阿寒町阿寒湖アイヌコタン出身。アイヌ料理店「ポロンノ」を家族で経営。また、阿寒観光汽船の早朝便にてアイヌ語り部としてアイヌの歌や楽器を紹介している。アイヌ音楽の姉妹ユニット「カビウ&アパッポ」としても活動中。

札幌大学ウレシパクラブに学生として所属していた際、「開発こうほう」の「アイヌ文化の振興、現在と未来」に、アイヌ文化に携わっている人たちにインタビューをしてそれを記事にしたいという依頼がありました。とても興味をひかれたので、卒業制作の一部として引き受け、4組の方々にお話を伺いました。12月号に引き続き4回目を紹介しますので、ぜひご覧ください。(竹内隼人)

最終回となる今回は、阿寒湖温泉在住の郷右近富貴子さんを訪ねました。富貴子さんにお話を伺おうと決めたのは、アイヌ語弁論大会^{※1}で富貴子さんのお子さんが、すらすらとアイヌ語の物語を語っていたのを見て衝撃を受けたからです。アイヌの日常生活からアイヌ語が消えてしまった現在、小学生ぐらいの子供が、どのようにしたら自らアイヌ語を覚えるのか、それには親のかかわり方になにか工夫があるのではないかと思い、お話を伺いました。

お祭りでアイヌ文化を体験する

—子供たちにどのようにアイヌ文化にふれてもらいたいですか。

郷右近 子供たちが参加できる行事には、なるべく一緒に衣装を来て参加したいなあって思い、毎年、まりも祭り^{※2}に参加しています。去年は子供たちと一緒に舟に乗ったら、舟が走っている間にまりも祭りを支えるコタン^{※3}のお兄さんたちが、丸木舟の一番先頭に付ける巨大なイナウ (inaw=木档) と、数個の小さいイナウを湖に返して、トーコロカムイ (tokorkamuy=湖の神様) に感謝する儀式をするんです。その儀式の時にそのお兄さんがうちの息子たちに声かけてくれたんです。男の人たちのやることだから私はもう一切関われないので、横でビデオを撮っていました。私が言うよりも、たとえば父とか、コタンにいるお兄さんたちが「ほら、お前真剣にオンカムイ (onkamuy=礼拝) すれよ」と言った方がいい。息子の後ろから息子に手をかけて「オンカムイはこうするんだぞ、ちゃんと真剣にやれ、にやつくな!」とか言いながら、「オホホホってやれ、お前も」と。後ろから

※1 アイヌ文化振興・研究推進機構主催。アイヌ語の学習の成果を発表する場として、また他の地域で学習している方々との交流の場として、さらに大会を開催する地域の方々にアイヌ語やアイヌ文化に触れていただく機会として毎年約1回の頻度で開催している。「イタカンロー」(=アイヌ語を話しましょう) という副題がついている。

オホホーとお兄さんが言うと、まあ息子もはにかみながらもオホ、オホホとかやりつつ、イナウを返したりするんですよね。

今後、中学、高校になってどのぐらいアイヌのことに携わっていくのかわからないですけど、そういう経験をいっぱいさせてやりたいと思うんです。できるうちにね。子供たちによく言っているのは、「お母さんは無理強いはしない」と。「アイヌ文化をただ好きでいてほしいと思うし、あなたたちはアイヌだからね」とは言っています。ただ、自由と言いながら、さりげなく縛っていると自分でも思いますよね。「自由だけど、あなたたちももしアイヌのことを今後一切知らない、関係ないとなったならその時点であなたたちの持つ文化は終わる」と。「その時点で途切れちゃうわ。でもまあそれもお母さんは仕方ないとは思いますが、お母さんは大事に思うからやってるよ」とは言います。私の手の内にあるうちは、いろいろなものを見せてやりたいと思います。手から離れるようになったら、もうそこは子供たち次第だと思います。

—子供たちの将来への思いはありますか。

郷右近 私が高校を卒業して大阪でいろいろ経験できたように、子供たちにも本州とか、いろいろなところに出て全く違う世界を見てきてほしいと思います。そこはすごく大事なあって。すぐ帰ってきてもいいけれど、とりあえず苦労はしたほうがいいのかなあ。ずーっとアイヌの中に居続けるのも、どうなんだろうと思うんです。逆に全くアイヌから離れて、全然違う社会、世界の中でぽっとアイヌが出てきたら、それがびっくり、うれしいと。まあいろんな生き方があるからね。

子供たちの目線で一緒に学ぶ

郷右近 アイヌのことって心のよりどころなんです。敬うことも、歌も踊りも、アイヌの心根というか考え方というのか。生き方、感じ方、自然に対する崇拝の気持ちもやっぱり自分の根っこにあるもので、大好き。好き

というより、すごく大事なものなんですね。私はそうなんですけれど、子供たちはどうかな。でも、その部分がよりどころであるなら、揺らがない気がするんです。阿寒には自然はあるし、アイヌのことは、歌でも踊りでも、本当に昔から脈々とつながってきていることだし、すばらしい。子供たちがどうあってほしいかというよりも、自分自身が勉強して、その姿をいつか子供たちが垣間見たときに「ああ！いんじゃない？」って思う、もし自分がそのきっかけになれば、一番うれしい。そこは一緒に勉強ですよ。

—アイヌ語弁論大会（イタンカー）でお子さんは見事でしたね。

郷右近 「イタンカー」も、「お母さんも出るよ」と言って結局私は出ない。子供たちにけしかけておいて。子供たちがやってるのを見ている。一生懸命「ああこれはいいなあ」とか言いながら、やっていますよ。イタンカーは楽しいです。子供たちと一緒にこれから徐々に練習します。「丸覚えじゃあだめだよ」とか、「棒読みで読むの？昔々あるところにお父さんとお母さんがいました…なんて伝わると思う？むかあーしむかしって言ったほうが、おーって思うじゃない」とか、言っています。息子は今回、シリコロカムイ（sirikorakamuy=大地を司る神）の話をするんです。



郷右近さんのお子さん（右から2番目寛（かん）君、3番目仁（じん）君とお友達。イチャルパ（先祖供養）にて（2014年6月、標茶町）

※2 盗難され売りさばかれた阿寒湖のまりもを湖に返してもらうことを目的として創設された儀式。第一回は昭和25年。それから毎年1回も休むことなく開催されている。

※3 阿寒湖畔にある「アイヌコタン」のこと。アイヌの民芸品店や飲食店、さらには踊りや人形劇を観ることができるアイヌシアター「イコロ」もある。

「カララット」というサケヘ(sakehe=神謡の中の繰り返し言葉)です。「シリコロカムイ、大地を統率する神の話」と日本語の題名がついていて、すごく大きな木の話です。話の中の「これから自分たちが獵に行くので、シリコロカムイよ見守ってください」というカムイノミ(kamuynomi=神への祈り)をるところまでできています。「かん(長男)!これ今回めっちゃいいんじゃない?男の儀式のこと言ってるよ!」みたいに励ましています。そのオンカムイをする動作で2回のすごく重い礼拝をし、3回の重い礼拝をし、胸をなでおろします。「かん、これいいね!これ、ジェスチャー付きでやったほうがいいんじゃない?」「男だし、お母さんがやったらおかしいけれど、男ならやれることだよ!」と。シリコロカムイは大きな大きな大地を支える木の話だから、本当になんていうんだらう、「今回、かんはいいね!」とやたらほめまくりです。結構、お互い楽しんで、その物語がどういいう物語なのかを、私は結構しつこく言ってると思います。

息子が「えーとえーと次、次…」と突っかかる。私は「大地に根を下ろし」と日本語で言うんですよ。「大地。大地ってなんていうの」と言うとうーん、ああ!モシリ ケシ タ」と思い出す。そういう風に、丸暗記じゃなくて自分がどんな物語を語っているのか、理解してくれたらいいなと、いつも思っています。娘の



まりも祭りの松明行進 (2015年10月)

場合は、それを無意識にやっていたから、びっくりしましたけれども。

私は子供たちと一緒にやるのが精いっぱい、なかなか「イタカンロー」に出られないけれど、すごく楽しいですね。練習する日は「はい!今日どこまで覚えたの」というのが口癖。でも、「お母さんなんか出たこともなくせに」と言われる。「はい。そうですね。すみませんね」と、一緒にやっています。

カピウ&アパッポ^{※4}でアイヌの世界観を表現する —カピウ&アパッポを結成したきっかけを教えてください。

郷右近 2011年かな。きっかけは、母と母のお友達の二人。「ジスイズ(店名)」という老舗のジャズ喫茶があって、「ここで絵美(富貴子さんの姉)とふっき(富貴子さん)のライブでもやればいいんでないの?」とマスターと話していて、マスターもすごく喜んで盛り上がったそうです。母にマスターのところへ行きなさいと言われて。姉もちょうどその年の夏に子供たちを連れて帰省するというので、それじゃあそのライブを企画しようじゃないかということに。誰かスポンサーがいるとかじゃなくて、自分たちでジャズ喫茶の「ジスイズ」でライブをしたのがきっかけですね。

—もともと組んでから一緒にやっていたということではないんですね。

郷右近 姉妹として幼少から歌を聞いていたり、感じていたり、アイヌに対する価値観もほぼ近い部分があったんですけど、なぜか二人で歌うことはそれまでなかったんです。でも、そのときに初めて二人で歌を合わせてみたら、楽しかった。お互いに、またやろうよとなって、その後、東京でライブがあったり、あちこちで声をかけてもらったり、自分たちでも企画してライブやっています。

まだまだ発展途上で、いっぱい勉強も練習もしないといけないなあと思うんですが、やっぱり楽しいです

※4 カピウ(kapiw=カモメ)、アパッポ(apappo=花)という意。郷右近富貴子さんと姉の姉妹ユニット。地元阿寒で伝承された歌を中心に、民族楽器であるムックリヤトンコリの演奏も行う。

よ。姉も私もそれぞれの持ち味が全然違うので、それをどのように組み合わせていくのか。ライブだからその時々でどんどん色が変わっていくので、本当に毎回チャレンジ、毎回賭けです。そういう感じです。でも、アイヌの音楽、歌はシンプルじゃないですか。私たちは、声と、楽器はムックリ (mukkur=口琴) とトンコリ (tonkori=弦楽器) だけだから、それでどこまで世界観を出せるかという感じなんです。それが、これからもっともっと広げられるんじゃないかと思っているんです。ゆっくりやっていこうねって感じですね。

アイヌ文化を発信することの心構え

—それらをふまえて、アイヌ文化を発信するうえで心がけていることはありますか。

郷右近 なんだろう、難しいね。発信…、やっぱり丁寧に、謙虚になることかな。謙虚さってすごく大事だなと思う。なんだかどこかで、気持ちのどこかで、もしかしたらアイヌということが得と感じていないか。今、特にオリンピックとかで。しかも、国や道は、“アイヌ、アイヌ”とこの頃ちやほやしている気もするんだけど。何か事あるごとにアイヌ文化を持ち出して、アイヌであることが偉いことのように勘違いしがちな部分もあるかなと思っています。でも、そこはやっぱり違うし、その部分はちゃんと謙虚でいたい。謙虚とは、人に対してもアイヌ文化に対しても、人に伝えるときにも謙虚に。そして人に伝えるときはちゃんと丁寧に伝えられたらいいと思っています。

—今後のアイヌ文化と自分ということで、どんな未来像を描いていますか。

郷右近 んー。良いばあちゃんになりたい。それなりに手仕事もできる、それなりに歌も歌える、それなりにイフンケ (ihunke=子守唄) やらヤイサマ (yaysama=即興歌)、物語のひとつずつぐらいはちょっとしゃべることができるばあちゃんに。かわいいフチ (おばあさん) になれたらいいなと思っています。ばあちゃんになっても

「ポロンノ^{※5}」やっていたいと思います。「あのばあちゃんの焼くポッチェ^{※6}はうめーど」「あのばあちゃんのトンコリはなかなかビートが効いてていいぜ」って言ってもらえたら最高ですね。かっこいいと思わない？

—かっこいいですね！いいですね！長い時間お話を聞かせていただきありがとうございました。

インタビュー日時2014年10月31日



インタビュアー

竹内 隼人 (たけうち はやと)

1992年生まれ、北海道札幌市出身。幼少の頃に家族の影響で札幌ウポポ保存会でアイヌの踊りに親しむようになる。札幌大学文化学部文化学科歴史文化コース卒業。在学中はウレシバ奨学生として札幌大学ウレシバクラブに所属。現在は白老町にある、(一財)アイヌ民族博物館の伝承課に勤務している。

※5 アイヌコタン内にあるアイヌ料理と手作りの店、民芸喫茶ポロンノ。阿寒の山の恵み、海の恵みを存分に生かした、伝統的なアイヌ料理から独自のオリジナル料理まで、北海道、当店ならではのお料理を味わえる身体においしい心楽しいアイヌ料理のお店。(http://www.poronno.com/ より)
 ※6 ポッチェイモ=potceimoのこと。雪の中で凍ったジャガイモが融けて発酵したものから澱粉をとり、漉して乾燥させた保存食。